研究ノート

障害者スポーツ，パラリンピックおよび障害者に対する意識に関する研究　第２報 ～2014 年と 2016 年の比較を中心として～[注1)]

A study on attitudes toward sports for people with disabilities, Paralympics and people with disabilities II ～ Comparison between findings of the investigation in 2014 and in 2016 ～

藤田　紀昭
Motoaki FUJITA

日本福祉大学　スポーツ科学部
Faculty of Sport Sciences, Nihon Fukushi University

Abstract : This study examined the level of recognition of words related to the Paralympics and attitudes toward people with disabilities and sports for people with disabilities in an internet survey of ordinary people. The questionnaire is the same as the one that used in the investigation carried out in 2014 after Sochi Paralympic games. This investigation was implemented in December, 2016 after Rio de Janeiro Paralympics. The number of people who responded to the survey was 2,066.

As a result, the ratio of people saying that they knew the event names such as "boccia", "goal ball", "Para badminton" increased from the previous investigation. However, there were very few people who knew about the technical terms particular to sports for people with disabilities, such as a classifier and the guide runner. These did not change since the last survey.

An increase of awareness about with disabilities and sports for people with disabilities was not seen since the last survey. The results also did not show big change in expectation regarding the legacy left by the 2020 Tokyo Olympics and Paralympics. It is important that fixed point findings like these be determined to see the changes left by the legacy of Paralympics games. These investigations should be done continuously in future.

キーワード：2020 東京オリンピック・パラリンピック，レガシー，ネット調査，経年変化
Keywords : 2020 Tokyo Olympic and Paralympic, legacy, Internet Investigation, Secular changes

はじめに

パラリンピックの東京開催が決定して以降，障害者スポーツに関わる国の予算は大幅に増加し[注2)]，各都道府県においても障害者スポーツ選手の発掘事業や選手の育成，強化のための経費を新たに予算化するなどの変化がみられる．新聞各紙はこれまで以上に障害者スポーツに関する話題を報道し（図１参照），リオデジャネイロパラリンピックのテレビ報道時間は大幅に増加した（図２参照）．また，企業は積極的に障害のあるスポーツ選手を雇用するようになった．第２期スポーツ基本計画ではスポーツを通じた共生社会等の実現，経済・地域の活性化，国際貢献に積極的に取り組むことが示され，障害者の週１回以上のスポーツ実施率を 40%程度（若年層

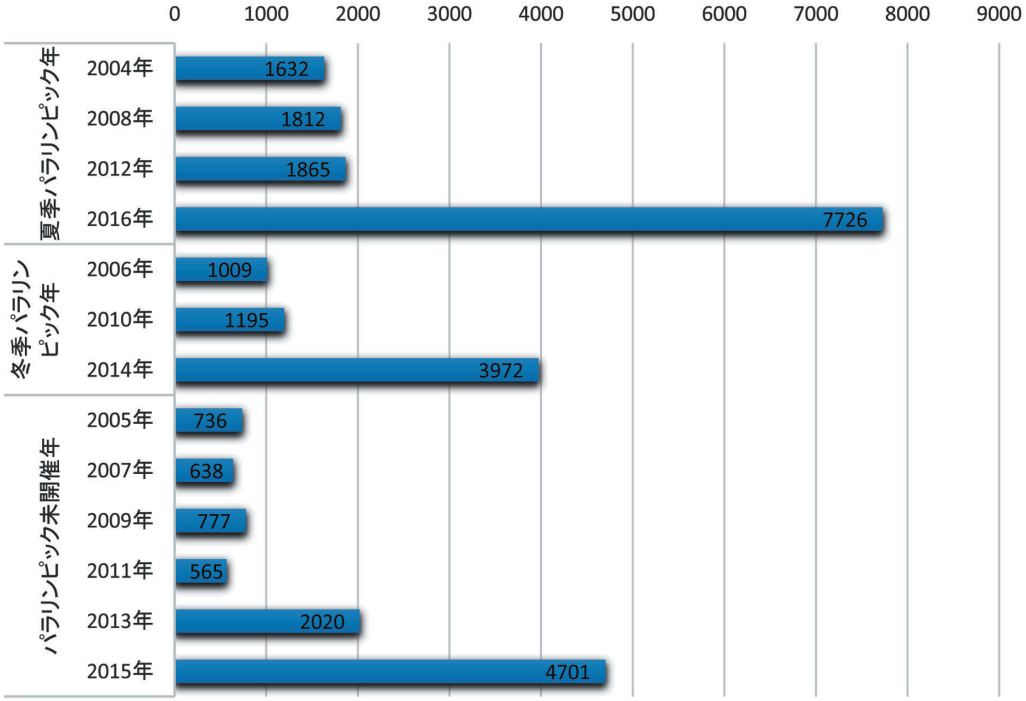

図 1　新聞報道記事数（2004 年～2016 年）

朝日新聞，毎日新聞，読売新聞データベースより藤田作成

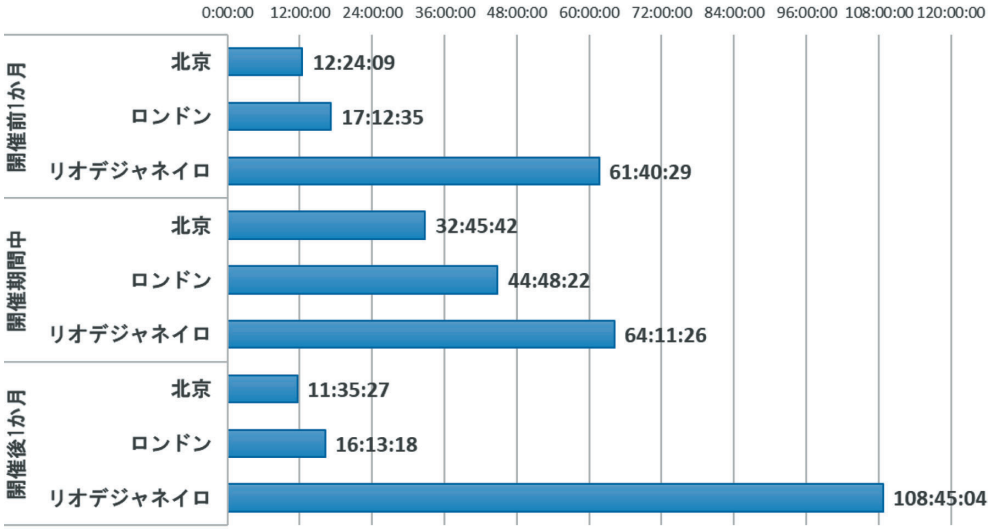

図 2　3 大会テレビ合計放送時間（時間）

出典　（公財）ヤマハ発動機スポーツ振興財団（2017）

(7～19 歳）は 50%程度）とするために，地域における障害者スポーツの推進体制の整備やスポーツ施設や障害者スポーツ指導者の充実などの事業を展開することに言及している．そして，これらが定着することこそが，パラリンピックのレガシーといえよう．Misener et al（2013）が指摘する通り，パラリンピックの国内開催は社会に大きな変化をもたらす可能性があるといえる．

オリンピック憲章には「オリンピック競技大会のよい遺産を，開催国と開催都市に残すことを推進すること」(オリンピック憲章第 1 章，第 2 項の 14) とあるが，具体的なレガシーの在り方は，文化，経

済，環境，イメージ，情報・教育，心理，スポーツ等非常に多様である（Leopkey & Parent, 2012）．Gratton & Preuss（2008）はこれら多様なレガシーの在り方をポジティブなレガシーかネガティブなレガシーか，計画的なものか偶発的なものか，有形のものか無形のものかの 3 つの視点から類型化している．障害者スポーツの認知度の上昇や人々の障害者に対する意識の改善はポジティブで偶発的で，無形のレガシーに分類される．しかしながら，こうした無形のレガシーの測定は難解で事例が少ないとされている（間野，2013）．それゆえに無形のレガシーに関する実証的な研究はオリンピック・パラリンピックを契機としたわが国の社会変化を記録し，大きな国際大会開催の意義を明らかにするうえで重要なものと考えられる．

1．目的

筆者はソチパラリンピック開催後の 2014 年 12 月に障害者スポーツの認知度，障害者や障害者スポーツに対する意識，2020 東京オリンピック・パラリンピックに期待するものに関する意識調査を実施した（藤田，2016）．その結果，「パラリンピック」という言葉は知られているが，具体的な競技名，「デフリンピック」や「スペシャルオリンピックス」等他の大会名，障害者スポーツに関わる専門用語などの認知は非常に低いことが明らかになった．また，障害者スポーツを体験したり，直接観戦，あるいはメディアを通して観戦したことのある人の方が障害者や障害者スポーツに対して肯定的なイメージを持っていることが明らかになった．2020 東京パラリンピックに対しては障害のある人のスポーツの機会や環境が充実すること，障害者に対する国民の理解が深まること，公共施設などのバリアフリー化が進展することを期待する人が多いことがわかった．前回調査の後，2016 年にはリオデジャネイロパラリンピックが開催され，先述のように，障害者スポーツやパラリンピックに関する報道が増加するなどの社会変化がみられた．

そこで，本研究では 2014 年実施の意識調査（藤田，2016）とほぼ同様の調査項目にて意識調査を行い，障害者スポーツの認知度，障害者や障害者スポーツに対する意識，2020 東京オリンピック・パラリンピックに期待することに関する 2016 年現在における人々の意識を明らかにするとともに，前回調査と比較を行いその変化を明らかにすることを目的とする．

2．方法

本研究では前回同様にインターネットを利用した調査を実施した．調査業務は株式会社マクロミル（本社，東京都港区）に委託した．ネット調査の利点は一般住民を対象とし，地域を越えた比較的大きなサンプリングが可能なことである．一方でサンプルがインターネット利用者に限られることや同一人物の二重回答のリスクが指摘されている．しかしながら，今回の調査が一般住民を対象としており，ネット調査の利点を生かせるということ，ほとんどの国民がインターネットを利用できる環境にあり，この点でサンプルの大きな偏りを避けられると考えられること，二重回答や回答者の年齢の偏りを最大限避ける方法がとられていることからインターネット調査を選択した．調査実施段階でマクロミル社には 1,153,825 名のモニターが登録されていた．その中から無作為に 38,770 名を選びアンケート調査を依頼した．あらかじめわが国の人口比率に応じて性別および年齢段階ごとに回答者数の上限を設定し，その人数に達するまで回答を受け付けた．モニターは公募型により同社に登録した人たちである．

質問内容および回答方法を筆者が指定し，ホームページ上のアンケート画面の作成，調査依頼，結果の収集を委託会社が行った．収集されたデータを受け取り，集計および統計分析を IBM SPSS Statistics 23 によって行った．調査期間は 2016 年 12 月 27 日から 28 日までの 2 日間である．

調査内容は個人の属性に関する質問項目として性別，年齢，世帯収入，障害者スポーツの体験の有無，障害者スポーツの直接観戦の有無，メディアを通しての間接観戦の有無，身近な障害者の存在の有無の前回と同様の 7 項目に障害者と一緒にスポーツをした体験の有無を加えた 8 項目とした．身近な障害者

とは本人，親族，友人，職場の仲間，その他の知人などである．

障害者スポーツ認知度に関する質問は前回同様「オリンピック」「パラリンピック」「デフリンピック」「スペシャルオリンピックス」(以上国際大会名)，「車いすテニス」「車椅子バスケットボール」「ボッチャ」「ゴールボール」「パラ・バドミントン」(以上競技名)，「クラシファイヤー」「ガイドランナー」(以上，障害者スポーツに関する専門用語）の計11項目について「知っている」「聞いたことがある」「知らない」の3つから選択してもらった．

障害者に対する意識に関しても前回同様，藤田(2003)，安井（2004)，高野（2011）らの調査項目を参考に，「障害のある人はかわいそうな人だ」「障害のある人は障害のない人と同じような生活は難しい」「障害のある人の中には特殊な能力を持った人がいる」 「障害のある人を理解することは難しい」「障害のある人の身体能力は障害のない人より劣っている」の5項目，障害者スポーツに対する意識として「障害のある人がスポーツを楽しむことは難しい」「障害者スポーツは特別なスポーツである」「障害者スポーツは見るスポーツとしては面白くない」「障害のない人のスポーツと比べて障害者スポーツではそれほど技術は必要ない」「パラリンピックはオリンピックと比べるとレベルが低い」の5項目，障害者に対する意識と合わせて合計10項目について「全くそのとおりだと思う」「どちらかといえばそう思う」「どちらとも言い難い」「どちらかといえばそうは思わない」「全くそうは思わない」の5つから1つを選んでもらった．

パラリンピックおよびオリンピックに期待することに関する質問も前回同様，東京都中央区（2014)，山田（2014)，佐藤（2015）らの研究を参考にして以下の14項目についてパラリンピックおよびオリンピックそれぞれ個別に質問した．項目は「子どものスポーツ機会や環境が充実する」「障害のある人のスポーツ機会や環境が充実する」「経済が活性化する」「国によるトップアスリートの育成・強化が充実する」「スポーツを通じて，住民が地域づくりに参加する機会が増える」「競技場等のスポーツ施設の整備が進む」「日本の国際的地位が向上する」「東日本大震災の被災地の復興支援が加速する」「外国人観光客が増える」「パラリンピック（オリンピック）の精神が浸透する」「障害者に対する国民の理解が深まる」「公共施設などのバリアフリー化が進展する」「幹線道路や公共交通機関の整備促進」「防犯対策の向上」である．回答者にはオリンピック，パラリンピックに関して最も期待することを14項目の中から1つ選択してもらった．

本研究では今回の調査結果を示すとともに，前回調査との比較検討を行う．なお，個人的属性別にみた障害者および障害者スポーツに対する意識の違いについてはほぼ前回調査と同様の結果がえられたが，新たな知見が得られたとまではいえないため，今回は検討の対象としない．その結果のみ付録として最後に示した．

3．結果

1）個人的属性に関する調査結果

表1は属性に関する調査結果を示している．性別と年齢はわが国の人口比率とほぼ同じである．年齢と世帯収入に関してはパラリンピック認知度，および障害者や障害者スポーツに対する意識の比較がしやすいように3段階に分類し直した．回答者総数は2,066名であった．

障害者と一緒にスポーツをした体験のある人は11.0%，障害者スポーツを体験している人は4.9%(前回3.3%)，直接観戦した経験のある人は4.8%(前回6.2%）と少ないが，メディア等を通して間接的に観戦したことのある人は60.7%（前回69.4%）と前二者と比較すると多かった．身近に障害者が存在している人は31.2%（前回32.8%）であった．

2）パラリンピック認知度に関する結果

図3は障害者スポーツ認知度を示したものである．大会名に関して知っているとした人の割合は，「オリンピック」(98.3%）と「パラリンピック」(97.2%）は非常に高いが，「デフリンピック」(2.2%）と「スペシャルオリンピックス」(3.9%）は非常に

表１　回答者の属性（n＝2,066）

項目	選択肢	%	%	項目	選択肢	%
性別	男性	49.4		障害者と一緒にスポーツしたことの有無	有り	11.0
	女性	50.6			無し	89.0
年齢	12-19歳	6.0	36.8	障害者スポーツ体験の有無	有り	4.9
	20-29歳	13.2			無し	95.1
	30-39歳	17.7				
	40-49歳	16.4	32.3	障害者スポーツ直接観戦経験	有り	4.8
	50-59歳	16.0			無し	95.2
	60歳以上	30.9	30.9			
				障害者スポーツ間接観戦経験	有り	60.7
世帯収入	200万円未満	8.2	30.4		無し	39.3
	200-400万円未満	22.2				
	400-600万円未満	20.7	39.8	身近な障害者の存在の有無	有り	31.2
	600-800万円未満	11.9			無し	68.8
	800-1000万円未満	7.2				
	1000-1200万円未満	3.3	7.1			
	1200-1500万円未満	2.2				
	1500-2000万円未満	0.9				
	2000万円以上	0.6				
	わからない	11.5				
	無回答	11.3				

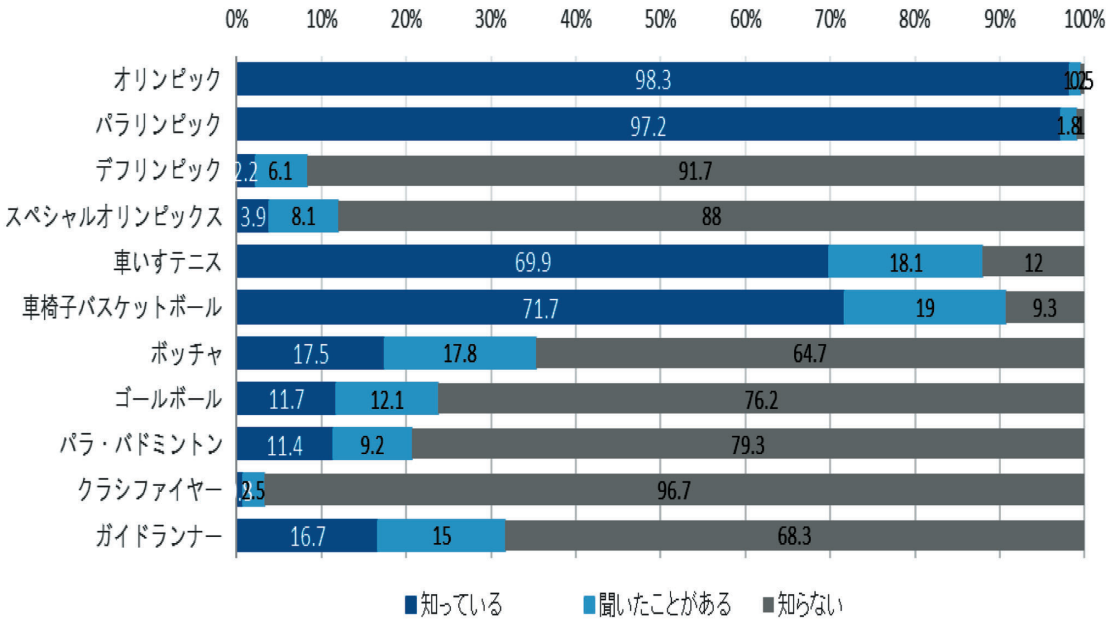

図３　パラリンピック認知度：あなたは次の言葉を知っていますか？（n＝2,066）

低かった．競技名では「車椅子バスケットボール」(71.7%）と「車いすテニス」(69.9%）は高かったが，他は 20%以下と低かった．パラリンピック特有の言葉である「クラシファイヤー」(0.8%）はほとんど知られておらず，「ガイドランナー」は 16.7%にとどまった．

図４は知っているとした人の割合を前回調査と比較した結果である．ボッチャ（15.6%増），ゴールボール（6.7%増），パラ・バドミントン（5.9%増），車いすテニス（5.6%増）はそれぞれ 5%以上増加していた．とりわけボッチャは前回調査の 9.2 倍と大きな伸びを示した．

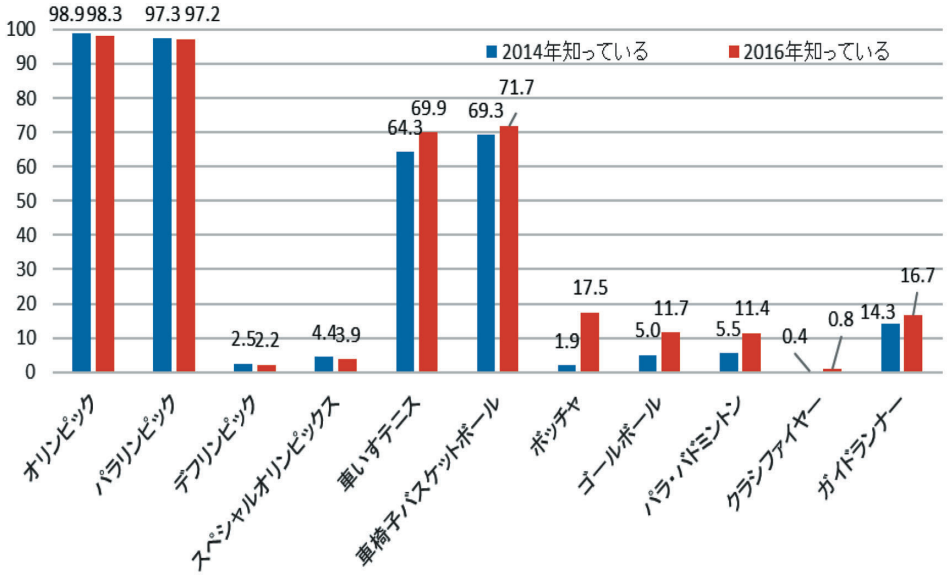

図４　知っていると答えた人の割合 2014～2016 年比較

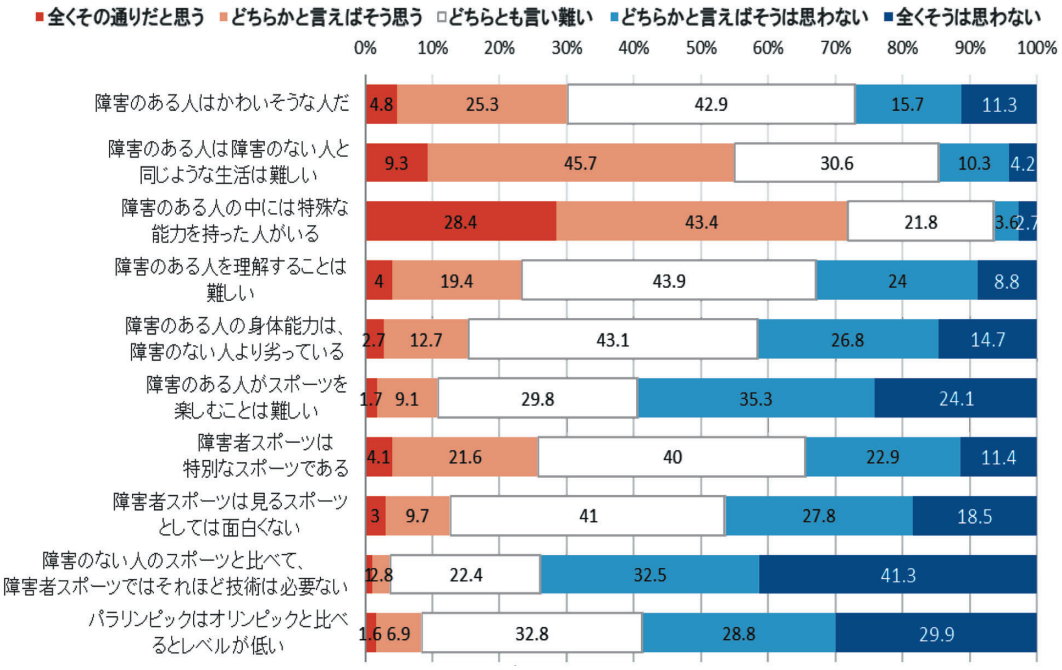

図５　障害者・障害者スポーツに対する意識（n＝2,066）

３）障害者および障害者スポーツに対する意識に関する結果

図５は障害者および障害者スポーツに対する意識に関する質問に対する答えの割合を示している．各問は障害者や障害者スポーツに対して否定的な問いかけとなっており，「全くそうは思わない」が障害者や障害者スポーツを最も肯定的に評価していることになる．ここでは「全くそうは思わない」と「どちらかと言えばそうは思わない」の合計（以降，「そうは思わない」とする）および，「全くその通りだと思う」と「どちらかと言えばそう思う」の合計（以降，「そう思う」とする）を比較検討する．「障害のある人はかわいそうな人だ」「障害のある人は障害のない人と同じような生活は難しい」「障害のある人の中には特殊な能力を持った人がいる」の３つの質問項目については「そう思う」と答えた人が

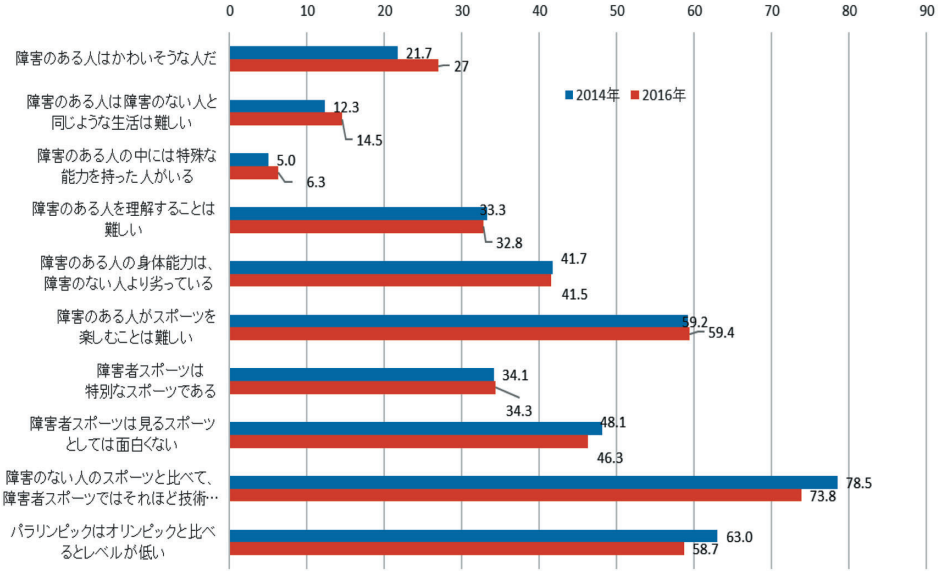

図６　障害者・障害者スポーツに対する意識 2014～2016 年比較―「そうは思わない」と答えた人の割合―

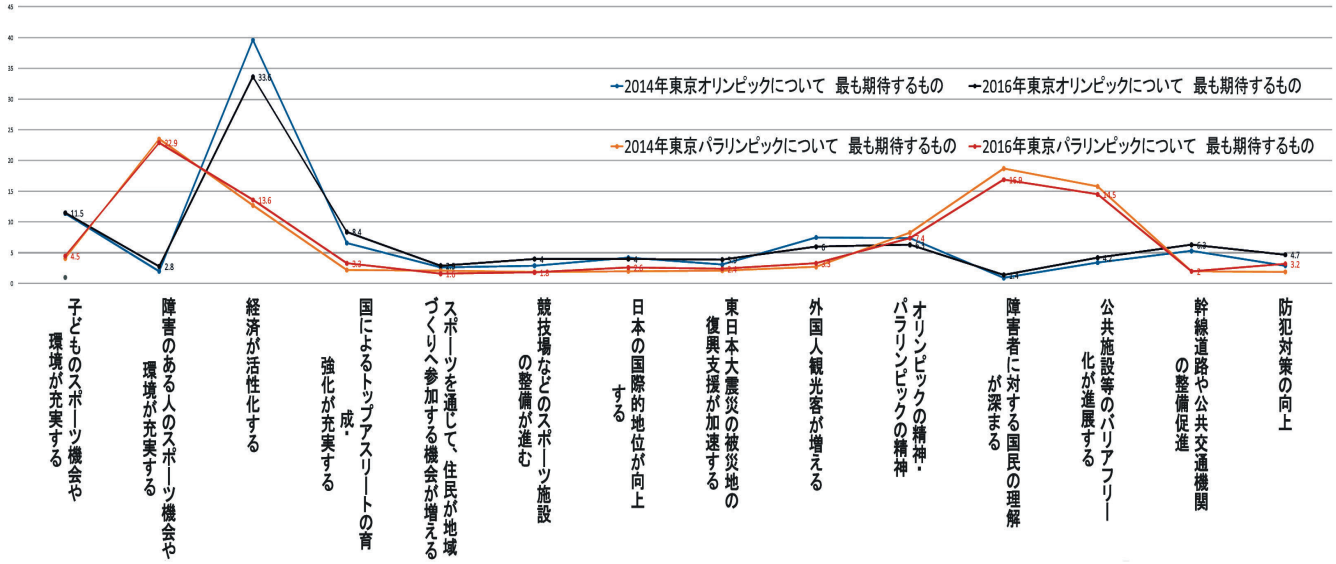

図７　東京オリンピック・パラリンピックに最も期待すること 2014～2016 年比較

「そうは思わない」と答えた人よりも多く，他の７項目はいずれも「そうは思わない」と答えた人の割合が「そう思う」と答えた人の割合よりも多かった．この傾向は前回調査と同じであった．

図６は「そうは思わない」と答えた人の割合を前回調査と比較したものである．5%以上増減した項目は「障害のある人はかわいそうな人だ」(6.3%増)のみであった．増加した項目は５つ，減少した項目も５つで，前回調査と比較してそれほど大きな変化はみられなかったといえる．

４）オリンピック・パラリンピックに期待することに関する調査結果

図７はオリンピックおよびパラリンピックに最も期待することを尋ねた結果を示している．図に示してある数字は今回の調査結果である．オリンピックに最も期待することは「経済の活性化」(33.6%)，「子どものスポーツ機会や環境の充実」(11.5%)，「外国人観光客の増加」(6.0%) が上位３つであるのに対し，パラリンピックに期待することとしては「障害のある人のスポーツ機会や環境の充実」(22.9

%)，「障害者に対する国民の理解が深まる」(16.9%)，「公共施設等のバリアフリー化が進展する」(14.5%) が上位3つであった．前回調査と比較してみると多少の数字の変動はあるがほぼ同様の傾向を示している．

4．考察

障害者スポーツに関する認知度をみると国際スポーツ大会の名前に関してはオリンピック，パラリンピックについてはほとんどの人が知っており，デフリンピック，スペシャルオリンピックスについては知っている人2〜4%程度で非常に少なかった．前回調査もほぼ同じ結果であり，パラリンピック以外の障害者スポーツ国際大会は未だにほとんど知られていないことがわかる．2007年の内閣府による調査以降同様の傾向が続いており，パラリンピックのみが多くの人々に知られているといえる．デフリンピックおよび聴覚障害者スポーツをキーワードに朝日，読売，毎日3紙の記事数を検索したところ2015年1年間で4，2016年は0，同様にスペシャルオリンピックスおよびSOをキーワードに3紙の記事を検索したところ2015年1年間で33，2016年は45であった．このようにデフリンピックやスペシャルオリンピックスに関しては報道もほとんどないことや，国際大会の国内開催もほとんどないことが影響していると考えられる．

パラリンピック採用競技の名前に関しては車椅子バスケットボールや車いすテニスは7割前後の人が知っていたが，ボッチャ，ゴールボール，パラ・バドミントンは20%以下と低かった．しかしながらこれら3競技は前回調査と比べると5%以上の伸びを示しており，報道量の増加に比例して認知度も上がったものと推測される．特にボッチャはリオデジャネイロパラリンピックで銀メダルを獲得して以降，小池百合子東京都知事が都庁にボッチャチームを作ってプレーしたり，ボッチャ甲子園と称する全国大会が開かれたりするなど非常に注目されるようになったことが影響しているものと考えられる．一方，クラシファイヤーやガイドランナーといった障害者スポーツに関する専門用語に関しては前回調査同様あまり知られておらず，障害者スポーツについて詳しく知る人が増えたとはいえない．

障害者や障害者スポーツに対する意識は前回調査と比較すると多少の数字の変動はあるが大きな変化はみられなかった．ヤマハ発動機スポーツ振興財団(2017) の報告によればリオデジャネイロパラリンピックのテレビ報道量は約234時間で北京パラリンピック時の約4.2倍，ロンドンパラリンピック時の約3倍に増えている（図2参照）．新聞報道量も増加していた（図1参照）．前回調査で障害者スポーツをテレビ，新聞，インターネットなどのメディアを通じて見たことのある人はない人よりも明らかに障害者や障害者スポーツに対する意識がポジティブであったことを考え合わせると，今回の調査において障害者や障害者スポーツに対する意識がより改善されていることが期待できるはずだが，結果はそうではなかった．テレビ報道量等が増えても人々がそれを見ているとは限らないこと，見ていたとしても意識変化が表れるにはさらに時間が必要かもしれないこと，各種メディアで障害者スポーツを見たとしても内容に注目して見るというよりはいわばテレビがついていただけという状況等がその要因として考えられる．あるいは他の様々な要因が重層的に影響することで意識は変わることを示唆しているのかもしれない．

5．まとめ

本研究では障害者スポーツの認知度，障害者および障害者スポーツに対する意識および2020東京オリンピック・パラリンピックに期待することに関して2014年に実施した調査と同様のインターネット調査を行った．その結果，障害者スポーツの認知度に関してはこれまであまり知られていなかったボッチャ，ゴールボール，パラ・バドミントンといった競技種目名を知っているとした人の割合が増加したが，クラシファイヤーやガイドランナーといった障害者スポーツに特有の専門的な用語については知っている人は非常に少なく，前回調査の結果と変わらなかった．

また，障害者や障害者スポーツに関する意識，お

よび 2020 東京オリンピック・パラリンピックに期待することに関しても前回調査と比較して大きな変化は認められなかった．

今回のような定点的な調査結果を残しておくことは無形のパラリンピックレガシーを考えるうえでの基礎資料として重要であり，今後も継続的に調査することが必要である．

謝　辞

本調査研究は JSPS 科研費 JP25350793 により実施した．

注

1　本論文では固有名詞などを除き「しょうがい」の表記は法令に合わせて「障害」とする．

2　スポーツ庁の資料によれば障害者スポーツにかかる予算額は 2014 年が約 17 億円，2015 年が約 26 億円，2016 年が約 35 億円，2017 年が約 31 億円となっている．

文　献

1）Atkinson, G., Mourato, S., Szymanski, S., & Ozdemrogle, E. (2008) Are We Willing to pay Enough to back the Bid ?: Valuing the Intangible Impacts of London's Bid to Host the 2012 Summer Olympic Games. Urban Studies 45 (2), 419-444.

2）藤田紀昭（2003）障害者スポーツの授業が大学生の態度に与える影響に関する研究，日本福祉大学社会福祉論集 108，pp. 45-54.

3）藤田紀昭（2016）障害者スポーツ，パラリンピックおよび障害者に対する意識に関する研究，同志社スポーツ健康科学 8，pp. 1-13

4）Gratton, C., and Preuss, H. (2008) Maximizing Olympic impacts by building up legacies. The International Journal of History of Sport 25 (4), 1922-1938.

5）Leopkey, B., & Parent, M. M. (2012) Olympic games Legasy: from general benefit to sustainable long-term legasy. The International Journal of History of Sport, 29 (6), 924-943.

6）Misener, L, Darcy, S., Legg, D. & Gilbert, K. (2013): Beyond Olympic Legacy: Understanding paralympic Legacy Through a Thematic Analysis, Journal of Sport management, 27, 329-341.

7）間野義之（2013）オリンピック・レガシー　2020 年東京をこう変える！ ポプラ社，54-55.

8）(公財）ヤマハ発動機スポーツ振興財団（2017）2016 年度障害者スポーツの振興と強化に関する調査研究報告書－テレビ放送，選手の認知度，大学による支援に注目して－

9）佐藤宏美（2015）国内外一般社会でのパラリンピックに関する認知と感心，日本財団パラリンピック研究会紀要 1，pp. 45-71.

10）高野千春（2011）障害者スポーツに対する学生の意識の変化－「初級障害者スポーツ指導員」認定カリキュラムを通して－，平成国際大学スポーツ科学研究所所報 6，pp. 9-14.

11）東京都中央区（2014）2020 年東京オリンピック・パラリンピック競技大会に係る区民等意識調査結果，http://www.city.chuo.lg.jp/bunka/olympic/_user_olympic_time_20140428.html.（2015 年 3 月 3 日閲覧）

12）山田大輔（2014）2020 年東京オリンピック・パラリンピックとの関わり方と国民の期待，スポーツライフデータ 2014，(公財）笹川スポーツ財団，pp. 18-23.

13）安井友康（2004）車椅子バスケットボールの交流体験が障害者のイメージに与える影響，障害者スポーツ科学 2 (1)，pp. 25-30.

付録1　属性別にみた「知っている」と答えた人の割合(%)

		性別	年齢3段階	世帯収入3段階	障害者と一緒にスポーツ体験	PS体験	PS直接観戦	PSメディア観戦	身近に障害者
		男・女 **<.01 *<.05	①:12～39歳 ②:40～59歳 ③:60歳～ **<.01 *<.05	①:～400万円 ②:～1000万円 ③:1001万円～ **<.01 *<.05	有・無 **<.01 *<.05	有・無 **<.01 *<.05	有・無 **<.01 *<.05	有・無 **<.01 *<.05	有・無 **<.01 *<.05
認知度クロス集計	オリンピック	男97.6 女98.9 *	①97.0 ②98.7 ③99.4 **	①98.2 ②98.9 ③98.2	有97.4 無98.4 **	有95.1 無98.4 *	有98.0 無98.3	有99.1 無96.9 **	有98.9 無98.0
	パラリンピック	男96.1 女98.3 **	①95.5 ②97.6 ③98.7 **	①97.1 ②97.6 ③97.7	有94.7 無97.5 *	有90.2 無97.6 **	有96.0 無97.3	有98.6 無95.1 **	有98.0 無96.8
	デフリンピック	男2.8 女1.6	①2.6 ②1.9 ③2.0 *	①1.4 ②2.4 ③2.1	有8.8 無1.4 **	有10.8 無1.8 **	有9.1 無1.9 **	有2.9 無1.1 **	有3.3 無1.8 **
	スペシャルオリンピックス	男5.2 女2.7 **	①3.8 ②3.3 ③4.7	①3.3 ②4.1 ③5.0	有14.0 無2.7 **	有19.6 無3.1 **	有19.2 無3.2 **	有5.4 無1.6 **	有6.5 無2.7 **
	車いすテニス	男68.6 女71.3	①63.9 ②67.1 ③80.1 **	①68.5 ②71.7 ③69.7	有81.6 無68.5 **	有75.5 無69.7	有80.8 無69.4 *	有81.3 無52.4 **	有77.6 無66.5 **
	車椅子バスケットボール	男70.0 女73.3 **	①68.2 ②67.7 ③80.1 **	①70.1 ②73.0 ③73.1	有85.1 無70.0 **	有80.4 無71.2	有85.9 無71.0 **	有82.9 無54.3 **	有79.8 無68.0 **
	ボッチャ	男18.8 女16.2	①13.2 ②17.8 ③22.3 **	①16.6 ②19.5 ③16.2 *	有29.8 無15.9 **	有32.4 無16.7 **	有34.3 無16.6 **	有23.5 無8.1 **	有24.5 無14.3 **
	ゴールボール	男15.3 女 8.2 **	①10.0 ②11.2 ③14.3 *	①9.7 ②13.0 ③12.0 **	有22.8 無10.3 **	有27.5 無10.9 **	有24.2 無11.1 **	有15.9 無5.3 **	有15.2 無10.1 **
	パラ・バドミントン	男11.1 女11.8	①9.6 ②9.0 ③16.1 **	①11.6 ②11.4 ③10.2	有23.2 無10.0 **	有29.4 無10.5 **	有31.3 無10.4 **	有15.1 無5.7 **	有15.8 無9.4 **
	クラシファイヤー	男1.4 女0.3 *	①1.3 ②0.4 ③0.6	①0.6 ②1.1 ③0.3	有3.9 無0.8 **	有5.9 無0.6 **	有3.0 無0.7 **	有1.0 無0.6	有1.6 無0.5 **
	ガイドランナー	男16.9 女16.4	①11.6 ②16.9 ③22.4 **	①13.9 ②19.3 ③17.0 **	有28.5 無16.7 **	有30.4 無15.9 **	有27.3 無16.1 *	有22.8 無7.2 **	有24.8 無12.9 **

付録２　「全くそう思わない」を５点～「全くその通り」を１点としたときの属性別平均値

		性別	年齢3段階	世帯収入3段階	障害者と一緒にスポーツ体験	PS体験	PS直接観戦	PSメディア観戦	身近に障害者
		男・女 **<.01 *<.05	①:12～39歳 ②:40～59歳 ③:60歳～ **<.01 *<.05	①:～400万円 ②:～1000万円 ③:1001万円～ **<.01 *<.05	有・無 **<.01 *<.05	有・無 **<.01 *<.05	有・無 **<.01 *<.05	有・無 **<.01 *<.05	有・無 **<.01 *<.05
意識平均	障害のある人はかわいそうな人だ	男2.96 女3.10 **	①3.17 ②2.99 ③2.92 ①>②・③**	①3.08 ②3.00 ③2.90	有3.38 無2.99 **	有3.35 無3.02 **	有3.21 無3.02	有3.06 無2.99	有3.08 無3.01
	障害のある人は障害のない人と同じような生活は難しい	男2.51 女2.58	①2.51 ②2.50 ③2.62 ③>②*	①2.57 ②2.52 ③2.45	有2.74 無2.52 **	有2.72 無2.53	有2.73 無2.53	有2.56 無2.51	有2.55 無2.54
	障害のある人の中には特殊な能力を持った人がいる	男2.23 女1.95 **	①2.26 ②2.07 ③1.91 ①>②>③**	①2.10 ②2.05 ③2.10	有2.06 無2.09	有2.27 無2.08	有1.86 無2.10 *	有1.91 無2.36 **	有1.92 無2.17 **
	障害のある人を理解することは難しい	男3.12 女3.17	①3.17 ②3.09 ③3.17	①3.12 ②3.12 ③3.14	有3.39 無3.11 **	有3.25 無3.14	有3.40 無3.13 *	有3.24 無2.99 **	有3.29 無3.08 **
	障害のある人の身体能力は、障害のない人より劣っている	男3.23 女3.53 **	①3.37 ②3.43 ③3.35	①3.39 ②3.38 ③3.30	有3.56 無3.36 *	有3.28 無3.39	有3.41 無3.38	有3.50 無3.20 **	有3.45 無3.35 *
	障害のある人がスポーツを楽しむことは難しい	男3.53 女3.89 **	①3.88 ②3.62 ③3.60 ①>②・③**	①3.66 ②3.69 ③3.69	有3.91 無3.69 **	有3.75 無3.71	有3.77 無3.71	有3.88 無3.45 **	有3.81 無3.67 **
	障害者スポーツは特別なスポーツである	男3.11 女3.21 *	①3.15 ②3.13 ③3.20	①3.14 ②3.15 ③3.11	有3.37 無3.13 **	有3.05 無3.17	有3.23 無3.16	有3.26 無3.00 **	有3.23 無3.13 *
	障害者スポーツは見るスポーツとしては面白くない	男3.33 女3.65 **	①3.59 ②3.44 ③3.43 ①>②・③**	①3.52 ②3.44 ③3.40	有3.81 無3.45 **	有3.52 無3.49	有3.70 無3.48	有3.71 無3.15 **	有3.67 無3.41 **
	障害のない人のスポーツと比べて、障害者スポーツではそれほど技術は必要ない	男3.96 女4.24 **	①4.11 ②4.08 ③4.12	①4.03 ②4.12 ③4.18	有4.26 無4.08 *	有3.89 無4.11	有4.03 無4.11	有4.35 無3.72 **	有4.24 無4.04 **
	パラリンピックはオリンピックと比べるとレベルが低い	男3.58 女3.99 **	①3.90 ②3.75 3.69 ①>②③**	①3.80 ②3.74 ③3.67	有4.01 無3.76 **	有3.61 無3.79	有3.86 無3.78	有3.96 無3.51 **	有3.91 無3.73 **